

第1020回サントリー定期シリーズ

7月17日(木) 19:00開演 サントリーホール

第172回東京オペラシティ定期シリーズ

7月18日(金) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第1021回オーチャード定期演奏会

7月20日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

7
/17

7
/18

7
/20

指揮：チョン・ミン

ヴァイオリン：神尾真由子*

コンサートマスター：三浦章宏

チャイコフスキー：

ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op. 35* (約36分)

- I. アレグロ・モデラートー モデラート・アッサイ
- II. カンツォネッタ：アンダンテ
- III. フィナーレ：アレグロ・ヴィヴァチッシモ

ー 休憩 (約15分) ー

チャイコフスキー：

交響曲第6番 口短調 Op. 74『悲愴』(約46分)

- I. アダージョー アレグロ・ノン・トロツポ
- II. アレグロ・コン・グラツィア
- III. アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ
- IV. フィナーレ：アダージョ・ラメントーソ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：Bunkamura (7/20)



- ♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪ 演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。終演後のカーテンコールも、マナーを守ってお楽しみください。

出演者プロフィール



©Lee Dayoun

指揮

チョン・ミン

Min Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団
アソシエイト・コンダクター

江陵市交響楽団音楽監督、2015年より東京フィルハーモニー交響楽団アソシエイト・コンダクター。2020年から23年にかけてボルツァーノ・トレント・ハイドン管弦楽団の首席客演指揮者を務めた。

上記オーケストラでのハイライトは、著名なソプラノ、ヘラ・イエサン・パクをフィーチャーした江陵市響との『椿姫』セミ・ステージ公演、マーラー「交響曲第4番」、ピアニスト チョ・ソンジンとの共演、東京フィルハーモニー交響楽団との定期演奏会など。最近では江陵市響との日本ツアーを大成功に導いた。

その他、シンフォニーにおいては、フィレンツェ五月音楽祭管、RAI国立トリノ交響楽団、ボローニャ市立劇場管、ウィーン室内管、マリンスキー劇場管、ドイツ・カンマーカデミー・ノイス・アム・ライン、スカラ座アカデミー管、カリヤリ歌劇場管、ヴァッレ・ディートリア音楽祭管、杭州フィル、深セン交響楽団、メキシコシティ・フィル、韓国室内管、釜山フィル、大邱オペラ座管など、数多くのオーケストラと共演。オペラ分野でも高く評価されており、マリンスキー劇場では『蝶々夫人』、ミラノ・スカラ座『魔笛』、韓国国立オペラ『蝶々夫人』『ドン・カルロ』『子供と魔法』、テアトロ・ポリテアマ・グレコ『椿姫』『ドン・カルロ』など、オペラの舞台でも活躍している。

7/17

7/18

7/20



©Makoto Kamiya

ヴァイオリン

神尾真由子

Mayuko Kamio, violin

4歳よりヴァイオリンをはじめる。2007年に第13回チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、世界中の注目を浴びた。ニューヨーク・タイムズ紙でも「聴く者を魅了する若手演奏家」「輝くばかりの才能」と絶賛される。国内の主要オーケストラはもとより、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、BBC交響楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、バイエルン州立歌劇場管弦楽団、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団などと共演するほか、サン・モリッツ、ヴェルビエなどの著名フェスティバルに登場している。ニューヨーク、ワシントン、サンクトペテルブルク、フランクフルト、ミラノなどでリサイタルを行っている。

2020年10月『J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ』を発表。これまで里屋智佳子、小栗まち絵、工藤千博、原田幸一郎、ドロシー・ディレイ、川崎雅夫、ザハール・ブロン各氏に師事。大阪府知事賞、京都府知事賞、第13回出光音楽賞、文化庁長官表彰、ホテルオークラ音楽賞はじめ数々の賞を受賞。楽器は宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス1731年製作「Rubinoff」を使用している。東京音楽大学教授。

楽曲紹介

解説=寺西基之

7/17

7/18

7/20

本日はチャイコフスキーの2つの代表作が並ぶ。ヴァイオリン協奏曲は中期の所産で、結婚生活の破綻によるショックから立ち直って創作意欲を取り戻した時期の充実した気分が漲る名品であり、交響曲第6番は最晩年、死に対する自身の思いを表出した円熟期の傑作だ。どちらも彼の人生がそこに映し出されている。

ヴァイオリン協奏曲の前、新婚生活の破綻の中で書かれた交響曲第4番では、作品のうちに人生の運命と苦悩を描出したことを彼はパトロンのメック夫人宛の手紙で事細かに記している。チャイコフスキーはこのように自身の人生を創作に反映させる作曲家だった。勿論彼に限らず、作品が人生と何らかの関わりがあることは多くの作曲家にいえることだが、チャイコフスキーの場合はしばしば自伝的ともいえるほどに自らの生き様や感情を吐露した作品が少なくない。本日の交響曲第6番はまさにその極みといえるが、第4番のような具体的な説明を残していないだけに、いかに彼の心情に肉迫するか、指揮者のセンスが問われる作品だ。チョン・ミンのアプローチに期待しよう。

チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op. 35

この作品は1878年に作曲された。前年の結婚の失敗から極度に落ち込み、転地療養のために国外で生活していたチャイコフスキーだったが、精神の落ち着きを取り戻していた3月にスイス・レマン湖畔のクラランでこの協奏曲の作曲に着手、この地で合流した同性の恋人でヴァイオリン奏者であるヨーシフ・コテックの助言を受けつつ作曲を進め、ロシア帰国後に全曲を完成させている。

初演は1879年3月にロシアの名ヴァイオリニストのレオポルト・アウアーによってなされるはずだった。ところが楽譜を見たアウアーは演奏不能の劣悪な作品だとききおろし、初演は中止となる。結局1881年12月4日ウィーンでアドルフ・ブロッキーの独奏で初演されるが、この時もウィーン批評界の大御所ハンスリックから「悪臭がする」と酷評されるなど、散々な結果に終る。しかし作品の真価を見抜いていたブロッキーは各地でこの曲を紹介し、それによって名曲として認められるようになったのである。

曲は、ヴァイオリンの技巧を効果的に生かした伝統的な3楽章構成のうちに、ロシア的な民族性を打ち出している。当初一般に理解が得られなかったのはそうした濃厚な民族性ゆえだろうが、その点こそこの曲の魅力であることはいうまでもない。アウアーも後になってこの曲の価値を認め、自ら進んで演奏するようになった。

第1楽章 アレグロ・モデラート — モデラート・アッサイ ニ長調 冒頭の管弦楽の短い序奏も、程なく現れる独奏の第1主題もいかにもロシア的情緒に満ちている。こうした民族色がハンスリックには“悪臭”と感じられたのかもしれないが、その点こそこの作品の美質はある。カデンツァは展開部の最後に置かれている。

第2楽章 カンツォネッタ：アンダンテ ト短調 チャイコフスキーらしい哀愁溢れる旋律が魅力的なカンタービレ楽章。

第3楽章 フィナーレ：アレグロ・ヴィヴァチッシモ ニ長調 民俗舞曲のトレパーク風の主題による活力漲るフィナーレである。

【作曲年代】1878年 【初演】1881年12月4日(ロシア旧暦11月22日)ウィーンにて、アドルフ・ブロッキーの独奏、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団による
【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー 交響曲第6番 ♯短調 Op. 74『悲愴』

チャイコフスキーの辞世の交響曲となったこの作品にはフランス語で「パティック(悲愴)」というタイトルが付されている。ロシア語では「パテティーチェスカヤ」に相当し、これは若干意味合いが異なり激しい感情性を指す語になるが、いずれにしても尋常でない感情表出がこの作品のテーマであることは間違いない。このタイトルは初演直後に弟モデストの提案で付けられたと伝えられてきた。それはチャイコフスキーの死後に弟が出した伝記にそのように書かれてあったからだが、最近の研究では初演前からチャイコフスキー自身が出版社との手紙のやりとりの中でこのタイトルについて言及していたことが明らかになっている。

では一体このタイトルにはどんな意味が込められているのか。チャイコフスキーはこの作品に標題的な内容があると述べながらも、それが具体的にどのようなものであるかを明らかにしなかった。作曲中に号泣したと手紙で述べていることから、よほど何か秘めておきたい悲しい個人的感情が作品に込められていることが窺える。また自身この交響曲がレクイエム的な性格を持っているとも述べており、彼にとってこの作品は一種のレクイエムであったことが窺える。

そのことは作品の型破りな構成にも現れている。第1楽章の暗い劇的かつ闘争的な性格や展開部でのロシア正教の死者のための聖歌の引用、伝統的な交響曲の楽章構成を逸脱してまで“ラメントーソ(悲しく、悼んで)”と記した悲痛な緩徐楽章を終楽章に置いたこと、息絶えるようなエンディング。こうした特徴からみても死に関わる何らかの標題的な内容がこの作品の裏に秘められていることはたしかだろう。

さらに1893年10月28日(ロシア旧暦では16日)にチャイコフスキー自身の指揮によってペテルブルクで行われた初演のわずか9日後に彼が急逝したことも、この作品の謎を深めることになった。死因はコレラによる病死だったが、この交響曲の性格から自殺説が早くから浮上し、1980年代には同性愛に関する裁判で

服毒自殺を命じられたという珍説（現在では否定されている）も現れた。そうした憶測を生んでしまうほどに、この作品は死に結び付く苦悩の感情を感じさせる作品である。

第1楽章 アダージョー アレグロ・ノン・トロppo 口短調 沈鬱な序奏の後、不安と慰めと闘争性が交錯する起伏に満ちたソナタ形式の主部が展開する。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア 二長調 優美さの中に憂鬱を秘めた5拍子のワルツ。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ ト長調 スケルツォとマーチを結び付けた楽章で、その祭典的性格は次の楽章の悲劇性を一層際立たせる。

第4楽章 フィナーレ：アダージョ・ラメントーソ 口短調 悲痛な感情に満ちたフィナーレ。むせび泣くような主題に始まり、重々しく進む。副主題もかつての幸福な日々を懐かしむように切ない。終り近く死を示すタムタムが響き、最後は死にゆくように閉じられる。

【作曲年代】1893年 【初演】1893年10月28日（ロシア旧暦10月16日）ペテルブルクにて、作曲者自身の指揮による

【楽器編成】フルート3（3番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、タムタム）、弦楽5部

てらにし・もとゆき（音楽評論）／1956年生まれ。上智大学文学部卒、成城大学大学院修士課程（西洋音楽史専攻）修了。音楽評論家として執筆活動を行う一方、（公財）東京二期会評議員、（公財）東京交響楽団監事、日本製鉄音楽賞選考委員、（公財）アフィニス文化財団理事などを務める。共訳書にグラウト／パリスカ『新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』ほか。